

事態緊迫 大胆に柔軟に

編集委員

竹内 敬二

「放射線量が高い原発事故ではだが作業するのか」

福島第一原発では、旧ソ連手
エルノフイリ原発事故のあ
と、いわばタブーになってい
た大問題に直面している。し
かし、今は緊急事態だ。政府
主導で知恵を集め、送電線破
敗や機材の大量投入、人海戦
術など多くの方法を検討、実
行するときだ。

16日朝の火事では、放射線
量値があまりにも高く、消防
車が消火作業を断念して帰っ
た。午後には自衛隊のヘリコ
プターが水の投下を試みたが
同じ理由で断念した。

原発敷地の内外では1時間
あたり10〜400シーベルト

トの放射線量が観測されてい
る。相当に高い値だ。

しかし、炉心の冷却は絶対
に続けなければならない。炉
心損傷が進めば放射性物質の
大量放出が起きてしまう。

茨城県東海村で1999年
に起きたJCOの臨界事故で
は、核燃料の再臨界を阻止す
るため、放射線下での作業が
必要になった。

作業は2人1組で行った。
走って現場に突入し、作業し
戻るまで約3分間。9組で作
業を終えた。個人の被曝量
の最大は、緊急作業の上限で
ある100シーベルトを
超える103シーベルト。
日本平均の自然放射線量の

70年分。これを3分間で浴
びた。

原子力は本質的にこうした
作業の存在を否定できない技
術だ。大規模な汚染は住めな
い土地をつくる。

86年のチェルノブイリ事故
では、露出した炉心にヘリコ
プターで砂を投下した。地上
でも多くの人が至近距離で作
業し、大量放出は1週間で止
まった。この決死的な作業が
なければ、世界はもっと汚染
されていた。

この後、日本でも強い放射
線下の作業が話題になった。
しかし、民主国家で体に有害
な仕事を命令できるのか、と
いう社会の根本問題に触れ

ることもあり、立ち消えにな
った。「日本では大事故は起
きない」という神話もあっ
た。

しかし、今は緊急事態だ。
速い判断と対応が必要だ。
15日に政府と東電が設置し
た「福島原発事故対策統合
本部」に情報と判断の権限
を集中させる。厚生労働省
が15日に、福島第一原発の緊
急作業向け被曝上限を引き
上げたように、制度も柔軟に
変える。

原子力を推進してきた人、
反対の人を問わず、今こそ原
子力を知る人、企業を知恵を
結集して欲しい。事態は差し
迫っている。